研究推進校事業報告書

＜取組と成果のポイント＞

(1) 道徳科の指導方法の工夫について

・　道徳科の授業において、自我関与が中心の学習、問題解決的な学習、体験的な学習を取り入れ、児童同士の思いや考えをつなげるような「基本発問」「中心発問」「補助発問」により、対話的に学び合う中で、教師が授業を的確なコーディネートしていくことや構造的な板書を工夫することで、深い学びとなる考え、議論する児童が多くなった。

(2) 児童の成長を願う道徳科の評価について

・　「年間評価計画」「児童観察シート」の活用や児童のポートフォリオ評価を用いて、児童の成長を丁寧に見取っていくことで、児童がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価（通知表に記載する道徳科の評価文の作成）をすることができた。

(3) 道徳科の家庭・地域との連携について

・　道徳科の授業公開、親子講演会や親子（家庭）道徳の日を設けることによって、保護者に道徳教育の取組を知ってもらうとともに、保護者と児童が互いの考えや思いを伝え合ったり、認め合ったりするよい機会となった。

・　本校の特色ある「ふれあい活動」は、地域の人々との交流をしていく中で、礼儀、感謝、勤労、郷土愛等について考える機会となり、道徳科の授業にも生かすことができた。

1　研究推進校の概要

学　校　名	所　在　地	電話番号	児童数	備　考
稲沢市立法立小学校	稲沢市平和町法立東瀬古７	0567(46)0572	182 人	

2　研究課題

(1) 「考え、議論する道徳」への質的転換を図るために**効果的な指導方法**を工夫する。

(2) 児童が自らの成長を実感し、意欲の向上につなげるような**評価を工夫**する。

(3) 地域の特色を生かした道徳教育の実践と「親子（家庭）道徳の日」といった**家庭・地域の連携**について取り組む。

3　研究主題とその設定理由

【研究主題】

「特別の教科　道徳」を要とした道徳教育の充実
－「考え、議論する道徳」の実現に向けて　－

本校では、道徳教育の抜本的な改善と充実に向けて、道徳科を要とした学校教育全体の教育活動の中で、道徳教育の充実を図るために、次のようなめざす児童像を設定し、研究に取り組むことにした。

【めざす児童像】

○　道徳的価値について主体的に考え、対話的に学び合う児童

○　自他を大切にしたり、認め合ったりする心をもって接しようとする児童

4　研究の概要及び特色

(1)　研究仮説

道徳科の授業において、道徳的価値に向けて、自ら考え、議論する場面の設定をするとともに、地域や家庭と連携を図り、児童の成長を丁寧に見取っていけば、児童は、道徳的価値について自分自身のこととして考えたり、対話的に学び合ったりするようになり、自他を大切にしたり、認め合ったりする心を育成することができるであろう。

(2)　研究組織

校内研究会組織

	①　研究開発部	②　環境整備部
低学年分会	１、２、３年担任	特別支援学級担任
高学年部会	４、５、６年担任	通級指導担当、養護教諭

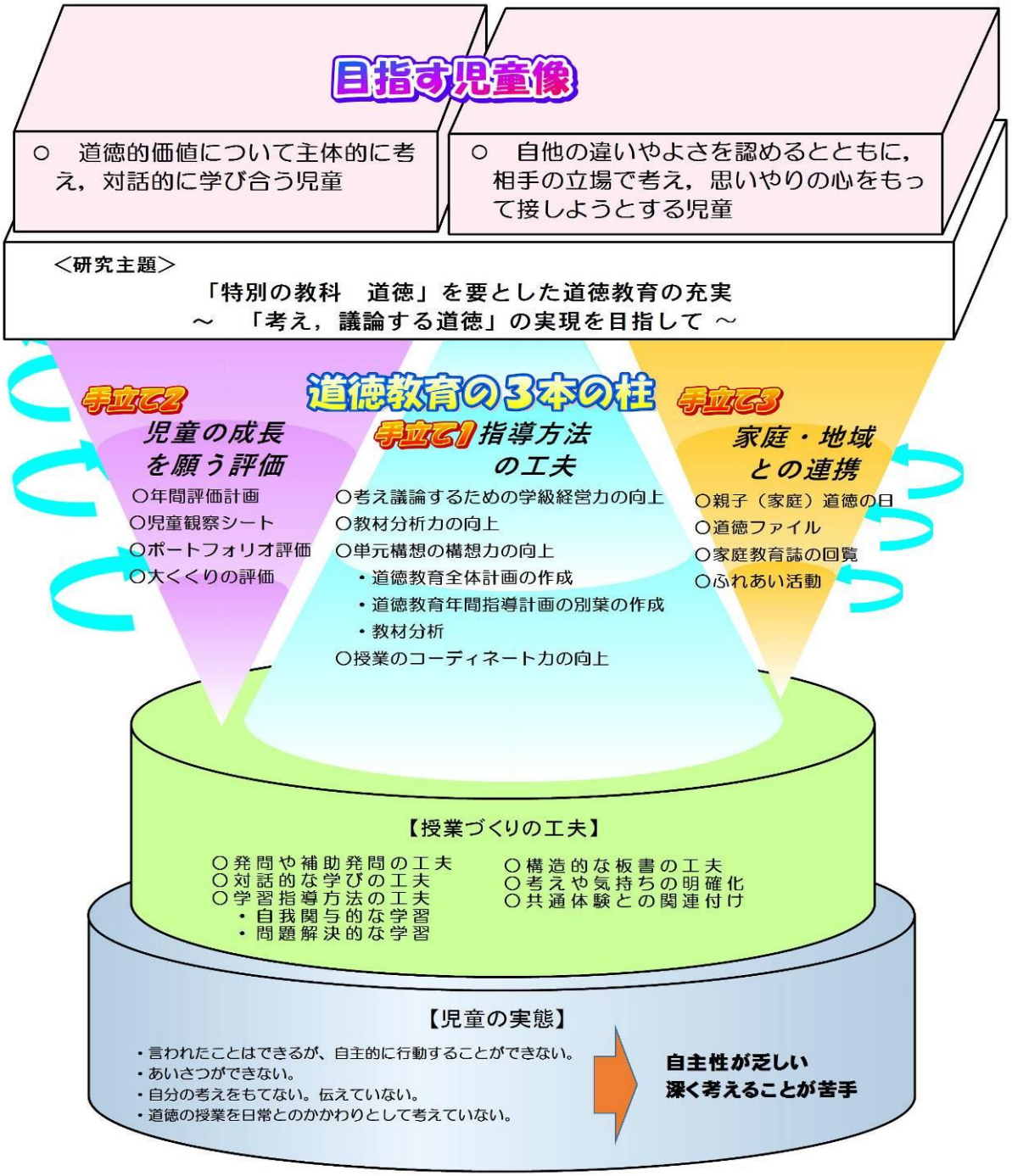
①　研究開発部⇒指導案作成、研究授業の分析

②　環境整備部⇒記録・ビデオ・写真（研究協議、授業　流れ、発言、板書）・家庭との連携・研究記録パネル作成

(3)　手立て

Ⅰ 指導方法の工夫	Ⅱ 児童の成長を願う評価	Ⅲ 家庭・地域との連携
１考え議論するための学級経営力の向上 ・　アサーショントレーニング ・　朝の１分間スピーチ ２教材分析力の向上 ・　全職員での教材分析 ・　教材分析の方法 ３道徳単元の構想力の向上 ・　道徳教育全体計画別葉の活用 ・　指導案の工夫 ４授業のコーディネート力の向上 ・　発問、補助発問	１年間評価計画の活用 ２毎時間の児童観察シートの活用 ３ポートフォリオ評価 ４指導要録、通知表に記載する大くくりの評価	１道徳ファイルの持ち帰り ２「親子（家庭）道徳の日」の設定 ３家庭教育情報誌（ゆう＆ゆう）の回覧 ４地域の方と学ぶ「ふれあい活動」

(4)　研究構想図



(5)　研究計画

期	月	現職教育の会	研究・研修内容
一学期	4	◎現職教育委員会	・研究テーマ　・研究組織の決定　・研究教科などの決定
		○現職教育全体会	・研究推進計画と指導の手だての検討 ・「親子（家庭）道徳の日」の設定
	5	・低高部会	・研究授業に向けての指導案検討（４年）
		○現職教育全体会	・授業研究Ⅰ　４年　道徳　花木真一教諭 教材名「言わなきゃ」Ａ－１善悪の判断、自律、自由と責任
		○第１回 道徳科研修会	・校内研修Ⅱ　道徳科講義 講師：愛知教育大学非常勤講師　水野達彦先生 講義内容：「考え、議論する道徳」へ質的転換を図る効果的な指導方法 研修会他校参加者　２３名
		◎家庭・地域	・「親子（家庭）道徳の日」の実施（２６日） 日曜学級にて、全学級一斉道徳授業を公開 実施した道徳科授業の内容について、家の人と一緒に考える
	6	○現職教育全体会	・研究授業に向けての指導案検討（６年）
		○第２回 道徳科研修会	・授業研究Ⅱ　６年　道徳　坂口翔平教諭 教材名「どうすればいいの？」Ｂ－１１相互理解、寛容 講師：愛知教育大学非常勤講師　水野達彦先生　指導高評 研修会他校参加者　１５名
	7	○現職教育全体会	・研究授業に向けての指導案検討（３年）
		○第３回 道徳科研修会	・授業研究Ⅲ　３年　道徳　永谷清久教諭 教材名「とくジーのおまじない」Ｂ－７感謝 講師：名古屋大学大学院教授　柴田好章先生　指導高評 研修会他校参加者　１３名
		◎家庭・地域	・親子（家庭）道徳の日 １学期の振り返りを家の人と一緒に考える（１２日）
		○現職教育全体会	・研究授業に向けての教材分析（５、１、６、２年）
夏季休業中	7	○第４回 道徳科研修会	・校内研修Ⅲ　考え，議論する道徳について 講師：愛知教育大学非常勤講師　水野達彦先生 模範授業：教材名「赤い屋根」（自作資料）Ｂ－８友情 講師：名古屋大学大学院教授　柴田好章先生　指導高評 講義内容：「考え、議論する道徳」へ質的転換を図る効果的な指導方法に向けて、授業分析 研修会他校参加者　２３名
	8	○第５回 道徳科研修会	・校内研修Ⅳ　考え，議論する道徳について ①法立小学校道徳科の取組の紹介 ②講義：内容「評価について」「資料分析から発問作り、授業のコーディネート」 講師：愛知教育大学非常勤講師　水野達彦先生 研修会他校参加者　１８名
		・低高部会	・研究授業に向けての指導案検討（５、１、６、２年）
二学期	9	○現職教育全体会	・２学期の研究の方向性と確認
	10	○第６回 道徳科研修会	・授業研究Ⅴ　５年　道徳　木村和久教諭 教材名「千羽づる」Ａ－２正直、誠実 講師：愛知教育大学非常勤講師　水野達彦先生　指導高評 研修会他校参加者　１９名
	11	○第７回 道徳科研修会	・授業研究Ⅵ　１年　道徳　伊藤恵美子教諭 教材名「ジャングルジム」Ｃ－１１公正、公平、社会主義 講師：愛知教育大学非常勤講師　水野達彦先生　指導高評 講師：名古屋大学大学院教授　柴田好章先生　指導高評 研修会他校参加予定者　２５名
		視察日	・授業研究Ⅶ　６年　道徳　坂口翔平教諭 教材名「どうすればいいの？」Ｂ－１１相互理解、寛容
	12	○第８回 道徳科研修会	・授業研究Ⅷ　２年　道徳　田島めぐみ教諭 教材名「どうしてうまくいかないのかな」Ａ－４個性の伸長 講師：愛知教育大学非常勤講師　水野達彦先生　指導高評 講師：名古屋大学大学院教授　柴田好章先生　指導高評 研修会他校参加予定者　１４名
		◎家庭・地域	・親子（家庭）道徳の日 人権週間に実施した道徳科授業の内容について、家の人と一緒に考える（１３日）
		○現職教育全体会	・２学期のまとめ
三学期	1	・低高部会	・研究のまとめについての検討
		◎家庭・地域	・講演「いのちの授業～幸せのカタチ。～」林ともみさん（アナウンサー）（２４日） 親子（家庭）道徳の日 命や幸せをテーマとした道徳科の授業の内容について、家の人と一緒に考える
		○第９回 道徳科研修会	小中連携　平和中学校の先生による道徳科授業〔Ｃ－１７伝統と文化の尊重〕（２７日） 講師：愛知教育大学非常勤講師　水野達彦先生　指導高評 講師：名古屋大学大学院教授　柴田好章先生　指導高評 研修会他校参加予定者　１８名
	2	○現職教育全体会	・研究の整理と評価
		○現職教育全体会	・次年度の研究指針についての検討
	3	◎家庭・地域	・親子（家庭）道徳の日 一年間の振り返りを家の人と一緒に考える（１３日）

(6)　研究課題にかかわる取組

①　指導方法の工夫（手立て１）

ア　考え議論するための学級経営力の向上に向けて

学級の中での議論（多様な考えや感じ方に出会って自分の考え方、自己の生き方を深めること）を豊かにするスキルＵＰとして、道徳科の授業以外で「アサーションスキルトレーニング」と「１分間スピーチ」を行う。

【資料１　こころのかるたを楽しむ児童】

○　アサーションスキルトレーニング

・　目的

自分の欲求、考え、気持ちなどを、素直に、正直に、相手のことも配慮しながら、その場の状況に合った適切な方法で表現することを学び、よりよい人間関係を築く。

・　児童の様子

アサーションスキルトレーニング集から、適切なものを選んで行ったり、「こころのかるた」を使ったりした。こころのかるたでは、４人１グループで行った（資料１）。話し手が、質問カードを引き、それを読み上げ、その質問に答える。聞き手は、話し手の言葉をじっと耳を傾けて聞いている姿があった。話し手の感想では、「質問に答えるのが楽しい」などと述べていた。また、聞き手の感想では、「いろいろな考えが聞けるのがいい」と友達の考えを聞くことを楽しみにしていることが分かった。話すことが苦手だった児童も、この時間においては、カードの質問に対して、自分の考えをグループの友達に伝えることができるようになってきた。

○　１分間スピーチ

・　目的

スピーチを通してみんなの前で話をするということに慣れさせることや話合う雰囲気をつくる。

・　児童の様子

「１分間スピーチ」では、日直が、朝の会でスピーチをすることにした。スピーチをする児童は、スピーチメモを見て話す児童がほとんどだったが、少しずつメモに頼らず、自分の思うように話すようになってきた。スピーチ後にはみんなから拍手をもらい、ほっとするとともに笑顔になっていた。２学期からは、聞き手が、スピーチの内容について質問もできることにして、話し手との受け答えがより多様となり、温かく充実した時間となっている。

イ　教材分析力の向上に向けて
～教材分析の充実～

研究授業の指導案検討の前に、必ず教材分析を行う。方法は、４～８人のグループでファシリテーターと発表者を決め、資料２のような手順で行う。

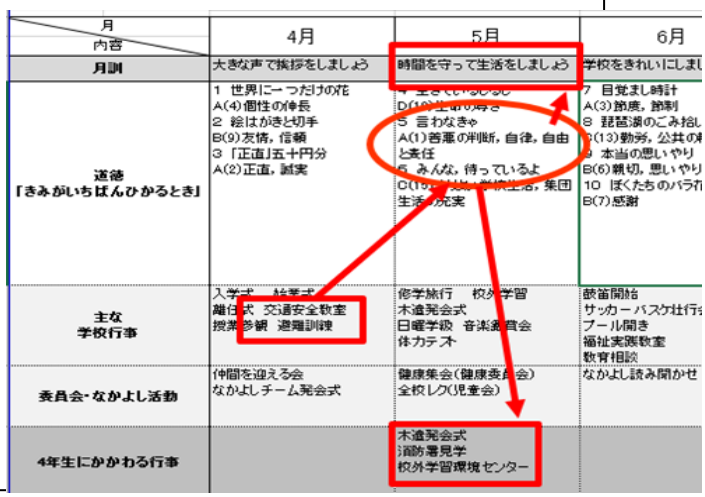
【資料２　教材分析の手順】

1　教材を読む：気になるところ（感動、疑問、印象、驚き、発見など）にラインを引き、付箋にコメントを書く。
2　見える化する：同じ内容のものを集め、模造紙に貼る。
3　カテゴライズ：分類にタイトルをつけ、道徳的価値にかかわるものを考える。
4　授業展開を構想する：教材をどのように活用するか考える。
（自我関与的活用、問題解決的活用、体験的活用など）
5　道徳科の目標から理想的な授業展開を考える：学習指導要領よりねらいを確認する。

ウ　道徳単元の構想力の向上に向けて
～別葉の活用～

道徳科を、「各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動などで学習した道徳的価値を、全体にわたって人間としての在り方や生き方という視点から捉え、 それらを発展させていこうとする時間」と捉え、「道徳教育全体計画の別葉（以下　別葉）」を活用する。「別葉」は、本校の特色ある学校づくりの取組である「異学年交流のなかよし活動」や「地域とのかかわりの行事」「月訓」などの項目を付け足し、各教科等との関連を図れるよう年度当初に作成する（資料３）。また、別葉から、道徳教育は学校の教育活動全体を通じて行うことを、教師が意識して授業を行うために指導案にも関連性を示す。

【資料３　別葉の活用】



月 / 内容	4月	5月	6月
月訓	大きな声で挨拶をしましょう	時間を守って生活をしましょう	学校をきれいにしま
道徳「きみがいちばんひかるとき」	1 世界に一つだけの花 A(4)個性の伸長 2 絵はがきと切手 B(9)友情，信頼 3「正直」五十円分 A(2)正直，誠実	4 生きているかな D(19)生命の尊さ 5 言わなきゃ A(1)善悪の判断，自律，自由と責任 6 みんな，待っているよ C(15)よりよい学校生活，集団生活の充実	7 目覚まし時計 A(3)節度，節制 8 琵琶湖のごみ拾い C(13)勤労，公共の精 9 本当の思いやり B(6)親切，思いやり 10 ぼくたちのバラ花 B(7)感謝
主な学校行事	入学式　始業式 離任式　交通安全教室 授業参観　避難訓練	修学旅行　校外学習 木造発会式 日曜学級　音楽鑑賞会 体力テスト	鼓笛開始 サッカー・バスケ壮行会 プール開き 福祉実践教室 教育相談
委員会・なかよし活動	仲間を迎える会 なかよしチーム発会式	健康集会（健康委員会） 全校レク（児童会）	なかよし読み聞かせ
4年生にかかわる行事		木造発会式 消防署見学 校外学習環境センター	

エ　指導案の作成（指導案事前検討会）

道徳科の中で道徳的価値の理解のための指導をどのように行うかは、授業者の意図や工夫によるものである。そのためには、授業者が、道徳的諸価値について理解をした上で、発問を工夫する必要がある。そこで、本校では、何を目的としている発問なのか、「価値理解」「人間理解」「他者理解」そして「自己理解」を指導案に記すことで、授業者が意図する授業展開を分かりやすくしている。そして、以下のような２グループに分かれて、事前検討会をしている。

道徳的諸価値についての理解（新学習指導要領より）

一つは、内容項目を、人間としてよりよく生きる上で大切なことであると理解すること（価値理解）である。二つは、道徳的価値は大切であってもなかなか実現することができない人間の弱さなども理解すること（人間理解）である。三つは、道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方、考え方は一つではない、多様であることを前提として理解すること（他者理解）である。

【発問を検討するグループ】

授業者は、どこに議論が進んでいくかをあらかじめ把握しておく必要がある。そのために、発問の後、児童がどのような反応があるか付箋に各々が書く。それを模造紙に貼っていくことで、一つの発問から生まれてくる児童の発言をできるだけ多く予想し、分類することで、発問の妥当性を検討する。

【構造的な板書を検討するグループ】

「板書は美しく飾るものではなく、思考のツールとして活用する」「授業後も掲示物として授業の足跡を残す」の２点が、板書のポイントであることを共通理解した上で検討する。もちろん、発問の後、児童がどのような反応をするか、できるだけ多く予想し、分類する作業は大切となる。その上で、時系列的な板書と構造的な板書のどちらが有効かを考える。また、板書に思考ツール（ベン図やウェビング図等）を活用して、議論を深めさせる工夫もしている。

オ　授業のコーディネート力の向上に向けて～補助発問の工夫～

講師の水野達彦先生の講義より、「誠実な自己内対話を引き出す発問を吟味するとともに、他者との対話の場面において、児童同士の思いや考えをつなげ、深めるための的確なコーディネートを行っていけば、児童は互いに耳をすましつつ、自らの思いや考えを積極的に披露し合い、多様な価値観と出会って、葛藤を深めるであろう」という考えを知った。そこで、「補助発問」がまさしく教師のコーディネート力が必要な部分だと考え、指導案に「コーディネート力の類型化」（資料４）を記すこととした。

【資料４　コーディネート力の類型化】
（水野先生の講義より）

A　任せる・見守る
B　認める・評価する・生かす
C　気付かせる・焦点化する
　提案する
D　軌道修正する・断ち切る
E　ゆさぶる・切り返す
　さぐりを入れる

カ　４年生の実践より　〔５月１６日　教材「言わなきゃ」　内容項目：善悪の判断、自律〕

教材「言わなきゃ」の教材分析の際には、ねらう道徳的価値に向けて押さえ方、導入・展開・終末の工夫、発問、補助発問などについて意見を出し合うことができた（資料５）。「２回目の言わなきゃの葛藤の場面を中心発問にするとよい」「この意見を取り上げると議論を深められる」「中心発問の前に１回目の言わなきゃの場面を押さえて、人間理解の発問にするとよい」などといろいろな角度から意見を出し合った。教師の視点とともに「きっとＡ君がこう発言するよ」と児童の反応と本時に目指す児童の姿も常に描きながら進めることができた。話し合われた意見の中から、授業者に合ったもの、児童の実態に合ったものを選び、指導案づくりに向かうことができた。役割演技については、会が終わった後も、納得がいくまで討論する姿もあった。教材分析を行うことで、教師の「教材を多面的に見る目」を育てるとともに、授業の中で児童の反応を描きながら、切り返したり、揺さぶったりするなど、授業を深める授業づくりの原点となった。

【資料５　グループでの教材分析】

４年生「言わなきゃ」の授業では、正しいことを行うが主題であることから、単元の構想では、児童の日常生活や異学年交流などの関連を意識した。そこで、４月に学級で実際にあった出来事を導入にあげた意識をもち、教材と出会わせることができた。さらに、児童の振り返りでは、「友達だから、言えなかったこともあったけど、これからは友達だから正しいことを言いたい」と今後の自分に向き合う記述があった。別葉の活用によって、教師も「これって、この間の道徳の授業のことだよね」と道徳科と教育活動全体をつなげる機会が増えた。

キ　６年生の実践より　〔１１月２８日　教材名「どうすればいいの？」　内容項目：相互理解、寛容〕

基本発問を「あなたが『私』なら、由希のしたことを許せますか。許せませんか。また、それはなぜですか」とした。自分の考えを明確にし、立場を紙コップで示させて議論させた。「許せない」が全体の３分の２、「許せる」が全体の３分の１、「迷う」が数人いた。 それぞれの立場で、「自分が最初に由希に悪いことをしたのだから、許せる」「私を友達と引き離そうとしたのだから、許せない」と理由を含めて考えを伝え合った。しばらく児童だけの相互指名で議論が行われた。議論の中には、「許せない気持ちも分かるけど」「許せない理由も分かるけど」と互いの気持ちを認めつつ、自分の考えを伝えていた。議論が平行線になった時、教師は、一度議論を止めた。教師は、意見が拡散することを予測し、収束させるために準備した補助発問「『許せる』立場の人と『許せない』立場の人の許せる心と許せない心の割合はどれくらいですか。その大きさを心情図に表してみよう」と投げかけた（資料６）。許せる心はどちらもあることを視覚化し、「許せる心はみんなもっているんだ」とねらいに迫ることができた。その後、中心発問「１か月後、前より仲よし３人組になった」という結末を示し、問題解決の過程を想像させた。許せないと最後まで言っていた児童は、「許せないと思っていたけど、１度相手の立場に立って、相手の気持ちを考えることが大切だと思いました」と振り返っていた。広い心で相手の過ちを許し、他者を尊重していこうという気持ちが高まったと考える。授業をコーディネートする上で、児童の実態を考え、ねらいに向けた発問や補助発問はとても有効な手立てと感じることができた。

【資料６　補助発問を投げかける教師】

② 児童の成長を願う評価（手立て２）

ア　年間評価計画〔年度当初〕

道徳科は、道徳性（道徳性の諸様相：道徳的な判断力、道徳的心情、実践意欲と態度）を養うために行っている。そこで、事前アンケートの観察によって児童の実態をつかんだ頃に、各学級の名列表（年間評価計画）に、児童各々の養いたい道徳性の諸様相を記し、評価に生かすこととした（資料７）。

【資料７　年間評価計画の項目】

【５年】　⇒育てたい資質・能力（道徳的心情＝1、道徳的判断力＝2、道徳

		A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	B-7
		善悪の判断、自律、自由と責任	正直、誠実	節度、節制	個性の伸長	希望と勇気、努力と強い意志	真理の探究	親切、思い
1	児童1							1
2	児童2					3		
3	児童3							

イ　児童観察シート〔毎時間〕

道徳科の授業では、上記の年間評価計画で計画したその日の抽出児を中心に、右の観察シートを使って観察記録を行うこととした（資料８）。

道徳児童観察シート

（　月　日）教材名：　　主題：　　（項目：　）

	評価		自身のこと		教師との関係		グループ討議		その他
			発言	挙手	視線	うなずき	発言	傾聴	
1		児童1							
2		児童2							
3		児童3							
4		児童4							

ウ　ポートフォリオ評価（学びの記録）〔毎時間〕

児童は、毎時間、学びの振り返りをする。これらの記録を活用して、児童がいかに成長したかを積極的に受け止めるとともに、児童を励ます個人内評価をした。

エ　大くくりの評価

（道徳科の評価文の記述について）

「大くくり」で成長をとらえるために、上記のア～ウを用いて、意識的に記録を残すようにしている。

オ　５年生の実践より

〔１０月２８日　教材名「千羽づる」　内容項目：正直、誠実〕

児童Aは、事前アンケートの「まじめに明るく生活していますか」（誠実・正直）という項目に、「全く」と回答した。そこで、児童Aに養いたい道徳の諸様相として「実践意欲と態度」に、年間評価計画に記入した。

【資料９　教師が見取った児童Ａの評価】

見取る場面	抽出児童Ａの様子
事前アンケート質問内容と回答	「まじめに明るく生活していますか」（正直・誠実）⇒「全く」項目を選択
授業中「児童観察シート」のチェック	挙手発言：○（内容確認） 視線うなずき：◎ グループ討議の発言・傾斜：◎ その他：ペア討論「正直に話す」を選択し、討論する。理由は、相手を傷つけないため
振り返りシート	「もし、こういうことがあったら、自分も正直に話したい」
ねらいとする道徳性の評価	実践意欲と態度◎

授業の中で、「児童観察シート」を使用し、３人を観察することにした。そのうちの一人児童Aの見取りを表にした（資料９）。授業で、児童Aは、一度発言をするとともに、真剣に友達の意見や教師の話を聞いていた。ペアでの話合いの場では、自分の考えを相手に明確にして伝え、相手の考えに相づちを打ちながら聞くことができた。このように、「児童観察シート」を使用することで、児童の様子を確実に記録することができた。

授業で使用したワークシートから、児童Aは、友達にうそをついてしまったことに対し、「正直に話す」という立場をとった。授業後に記入している「学びの記録」には、「もし、こういうことがあったら、自分も正直に話したい」と記入した。このことから、「誠実・正直」の項目について、児童Aには、「実践意欲と態度」をこの授業を通して、養うことができたと評価した。

③　家庭・地域との連携（手立て３）

ア　親子（家庭）道徳の日

学期	１学期		２学期	３学期	
日にち	5 月 26 日（日）	7 月 12 日（金）	12 月 13 日（金）	1 月 24 日（金）	3 月 13 日（金）
家庭で一緒に考える内容	・日曜学級（一斉道徳科授業）で行った授業の内容	・道徳ファイル	・人権週間で行った道徳科の授業の内容	・全校道徳講演会「いのちの授業～幸せのカタチ。～」林ともみさん（アナウンサー）	・道徳ファイル

・　授業で行った内容を家の人とも一緒に考えてもらうことで、さらなる道徳的価値の幅を広げることを目的とする。

・　児童は、道徳科の教科書と道徳ファイルを持ち帰る。家の人とその教材を読んで、内容について一緒に考える。家の人が感想を書いて児童が持ってくる。

イ　道徳ファイル

・　道徳科で何をやっているのか、児童がどのように考えているのかなど児童の様子を知ってもらうことを目的とする。

・　児童は、学期末に道徳ファイルを持ち帰る。家の人が、学期の振り返りを読んで、児童に向けて励ましのコメントを書いて児童が持ってくる。

ウ　家庭教育情報誌（ゆう&ゆう）の回覧

家庭教育や道徳に関心をもってもらうために、ＰＴＡ活動と連携し、学級ごとに３冊を購入してもらい、１か月間で、全家庭を回覧して読んでもらっている。ある家庭では、ゆう&ゆうの内容のことで会話する場面があることを家庭教育アンケートで分かった。

エ　ふれあい活動（地域の方と学ぶ）

「ふれあい活動」は、下記のねらいで取り組んでいる。

・　地域の名産や伝統文化、地域の自然、地域で働く人々などについて探究する活動を通して、地域のよさを自覚し、人々にはたらきかける体験活動を推進することにより、地域の人々との絆を強めたり、道徳的心情を高めたりする。（伝統文化の尊重、自然愛護、勤労、感動等）

・　いろいろな人とのかかわりや仲間とのかかわりを通して、豊かな体験や経験をすることにより、自分の考えをもち、相手の考えを受け止め、地域の人々に感謝し、ともに高め合うことのできる子を育てる。（礼儀、感謝、思いやり、相互理解等）

また、中学校の先生が、６年生学級で、交流授業を行っていることも地域の特色である。今年は、地域に根ざした「校歌」を教材とした道徳科の授業を行った。児童は、「これからの平和町※を自分が大切に築いていくぞ」という気持ちを高めた。（※は、校区内の地名）

オ　２年生の実践より〔１２月２日　教材名「どうしてうまくいかないのかな」内容項目：個性の伸長〕

２年生では、「どうして　うまくいかないのかな」を取り上げ、個性の伸長について学習した。何をやってもうまくいかず落ち込む主人公が、家族によさを認められて自分を好きになれた場面で、児童らは「キラキラ」「ぽかぽか」「すっきり」「ほっとした」「次はもっと挑戦するぞ」「自分を信じられる」と、自分たちなりの言葉で主人公の心情を考えた。主人公のよさを追うことができ、自分自身のよさを探す場面では、得意なことやがんばっていることを考えることができたが、言葉が出てこない児童も数人いた。

しかし、親子（家庭）道徳の日に道徳ファイルを持ち帰って親子で教材に取り組んだことにより、児童自身のよさを見

【資料 10　親子（家庭）道徳の保護者コメント】

「ふだんの生活の中では、大事なことと分かっていながら、あまりじっくり話もせずに過ぎてしまうことが多々あります。こういった機会を通して一緒に考え、話をする時間をもててよかったです」

「子供と一緒に教材を読んで、どう思う？などと話していると、自分もどうだろうとか、子供に日常どう接しているのか、子供を通して発見することも多くあることに気付きました」

付けてもらえたり、失敗が多い自分を保護者に受け止めてもらえたりと、主人公と同じ体験をすることができた。親に認められたことにより、「自分が好きじゃなかったけど、今は好きになりました」「これからはみきちゃん（主人公）と一緒に、前を向いてがんばろうと思います」と、前向きな発言が増えた。資料10の保護者コメントから、今後も取り組みの継続を願う声もあり、親子で道徳に取り組むことが家庭でもよいこととして受け止められていることが分かる。学期末に、道徳の振り返りをした。児童らは「こんなにやったんだね」「こんなことを考えていたんだ。懐かしいなあ」とつぶやきながら、学期末の振り返りを書いた。保護者に見せることを楽しみにしている児童も多く、うれしそうな顔で書いていた。

保護者のコメントからは、「目に見えて成長しているんだと分かりました」「学んだことがふだんの生活に結びついていてうれしく思います」と、振り返りの言葉を見る中で子供の心が成長している様子を喜ぶ声や、「道徳の授業で学び感じたことを生活面でも生かすことができるよう、親としても見守り、サポートしていきたいです」との声があり、家庭での接し方を考える機会になった。

５　研究の評価

(1)　研究の成果

①　手立て１「指導方法の工夫」

研修会では、協議の視点を定め、よかった点と課題・改善点を市内他校延べ約170名の参加者とともに話し合ってきた（資料11）。協議後には、講師の水野達彦先生や柴田好章先生に指導・助言をいただき、参加者のアンケート等を根拠に、「次へつなげる課題」を明らかにし、研修を行った。１２月２日の研修会で全学年の授業研究を終え、今年度の本校の取組の評価をいただいた（資料12）。

【資料11　協議会のまとめ】

第８回　道徳科研究集会　１２月２日（月）
第２学年　道徳授業　「どうしてうまくいかないのかな」（光村図書）

＜本時のねらい＞
・「Ａ－４　個性の伸長」
＜議論するための指導の工夫＞
視点１：　話合いの前にワークシートに自分の考えを書くことにより、自分の意見をもたせる。
視点２：　話しやすい場を確保するために、３～４人組を編成する。

＜協議内容＞	視点１	視点２	その他
○よかった点	○自分自身と向き合える時間。 ○考えが持てたか持てていないかの明確化。 ○丁寧な机間指導。	○友達から自分のよさやひを教えてもらう。 ○話しやすい雰囲気。	○たくさんの意見。 ○教師の発言の受け止め。
●課　題	●発問。	●「教え合い」か「伝え合い」か。深まりは？ ●書けない児童への支援方法。	
☆改善点	★具体例あげて、考えのヒントとさせる。	★話合いの時間という意識のもたせ方。⇒いすの向きを変える　など。	

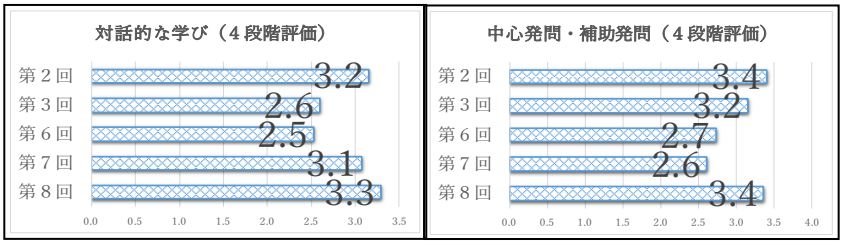
＜次へつなげる課題＞
・教材で深めた後の自分自身に向かう場面の流れ。
・全員参加への工夫。

【資料12　水野達彦先生の評価要約】

① 学級経営力について⇒○　発達段階に応じた、枠組みにとらわれない学級づくりが必要。
② 教材分析力について⇒○　教材を見抜く力をさらに磨く　●　教材を批判的に見ることも大切。
③ 道徳単元の構想力について⇒○　「授業づくり」は、「ドラマづくり」。教員は、舞台監督。板書は、職人技。
⇒●　抽出児の実態と願う姿は、指導案の「児童観」に記すとよい。
④ 授業のコーディネート力について⇒●　まだまだ課題。発達段階に応じた「切り返し」や「揺さぶり」がある。
⑤ 児童の成長を願う評価について⇒●　個の評価は、もっと戦略的であるべき。児童の成長を願う思いを指導案に記す。

また、授業の参観者のアンケート（資料13）では、対話的な学びを問う項目で評価が高かった授業は、問題解決的な授業展開であり、十分に「教材分析」することが大切であることが分かった。また、発問のよさを問う項目も評価が高く、友達との対話により考えを深めるためには、発問を吟味する「教材分析」や「発問や板書の事前検討」が有効であったと考える。

【資料13　授業の参観者のアンケート結果】



② 手立て２「児童の成長を願う評価」

児童の変容を丁寧に見取ることで、次のような通知表の評価をする見通しが立った（資料 14）。

【資料 14　道徳科の評価文の記述の仕方】

・　令和元年度８月愛知生徒指導研修会の夏季研修：一宮市立浅井中学校校長　山田貞二先生案より（法立小学校用に一部アレンジしてあります）

道徳科の評価文の構成

☆内容項目の大くくり…四つの視点（ABCD）
どのような学習を行ったのか
A「自分自身に関する学習」
B「人との関わりに関する学習」
C「集団や社会との関わりに関する学習」
D「生命や自然、崇高なものとの関わりに関する学習」

★前半
道徳科の授業でどのような学習活動の様子が見られたか。（学習状況の様子）

★後半
発言、記述、パフォーマンス等の顕著な姿が見られた教材の学習でどのような思いや考えをもてたか。（深められたか。）…成長の様子

★具体例（オプションで）

A「自分自身に関する学習」では、自分と違う友達の考えにふれ多面的・多角的に物事を考えることのよさに気が付き、広い視野から物事を考えて行動していこうとする思いをもつまでになりました。特に、教材『〇〇〇〇〇』では、本当の幸せは、表面的なものからは生まれてこないことを道徳ノートに記述するまでになりました。(・・・記述しました。)

B「人との関わりに関する学習」では、ブレインストーミングや小集団での話合いを通して、自己の不完全さに気付き、他者のよさに目を向けていこうとする発言や記述をしました。特に、『〇〇〇〇〇』の教材を通して、家族との関わり方について、積極的に関わっていこうとする意欲が大いに高まりました。

C「集団や社会との関わりに関する学習」では、トリオ学習や問題解決的な話合いを通して、学校を支えているのは自分たちであるということに気付き、集団の中で自分の役割を自覚し、責任を果たそうとする発言をしました。特に『〇〇〇〇〇』の教材を通して、学校のために自分にできることを実行し、下級生に伝えたいという意欲をもつまでになりました。（ ・・・という意欲をもちました)。

D「生命や自然、崇高なものとの関わりに関する学習」では、環境の整わない中でも懸命に生きる主人公たちの生き方を自分の現状と照らし合わせた話合い活動を行い、感謝して生きることの大切さを考えるまでになりました。特に『〇〇〇〇〇』の教材では、人のために働きたいという思いをもつまでになりました。（・・・という思いをもちました。）

「道徳性の成長」が見えるように記述する。

・・・と記述するまでになりました。　　・・・と記述をしました。
・・・という思いをもつまでになりました。　　・・・という思いをもちました。
・・・という考えをもつにまでなりました。　　・・・という考えをもちました。

道徳科の評価（新学習指導要領　道徳編より）
・個々の内容項目ではく、大くくりなまとまりを評価する。
・児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として記述する。
・年間や学期といった一定の時間的なまとまりの中で、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長を記述する。

③　手立て３「家庭・地域との連携」（家庭教育アンケートより〔11 月〕）

家庭教育アンケートでは、「親子（家庭）道徳の日」の設定が、親子で話すきっかけとなっているか」の問いに 56%の保護者が「大変よく当てはまる」「だいたい当てはまる」と答えている。また、親子で話していることが児童の道徳性の基盤となり、道徳科の授業での発言にもつながっていることが、道徳ファイル（資料 15）よりうかがえた。

【１学期の親子（家庭）道徳の日の児童 A の保護者のコメント】
（中略）本当に申し訳ないと思う心、それを正直に言う勇気が大切なのだと考えさせられました。

【道徳科「相互理解・寛容」の授業の中での児童 A の発言】
謝って、「私」と朝実がやっていたことを正直に言うのが大切。由希がしていたことを勇気を出してだめだよと言うとよい。

【資料 15　道徳ファイル】

また、３学期の学校公開日には、林ともみさんの「幸せのカタチ」と題した講演会の内容を教材として、道徳科の授業を一斉公開した。教師は、研修で培った授業のコーディネート力を生かして授業を行い、保護者からもコメントをいただくことができた。

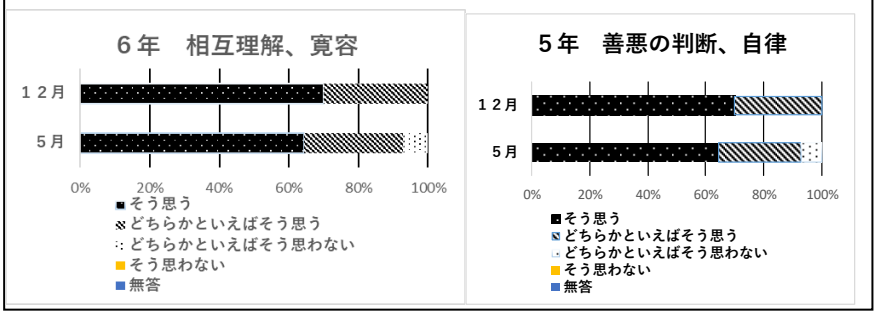
④　児童の変容（道徳教育に関する質問調査より）

本研究では、「道徳的諸価値について主体的に考え、対話的に学ぶ児童」を目指す児童像としていることから、道徳教育に関する質問調査では、質問５「『道徳科』では、他の人の考えを聞きながら、自分のことについてよく考えている」に着目した。５月の質問調査では、77%という多くの児童が、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的に答えていた。そこで、主体的に考えている児童が、各学年の重点目標として掲げている道徳性（資料 16）についてどう考えているかクロス集計（資料 17）で変容を考察した。すると、特に高学年に「そう思う」と答えている児童が増えていることが分かった。このことから、「道徳教育の３つの柱」で、道徳科の授業や道徳教育を行うことで、道徳的諸価値について自分自身のこととして考えたり対話的に学び合ったりしている児童は、道徳的諸価値が高まったと考える。

【資料 16　各学年の重点目標より着目した質問調査の項目】

１年〔問 17〕「きまりをまもる」
〔問 18〕「みんなでつかうものを大切にしている」
〔問 19〕「誰とでもなかよくする」
２年〔問 6〕「自分にはよいところがある」
３年〔問 20〕「家の人やお年寄りに、尊敬と感謝の気持ちをもって接する」
〔問 24〕「みんなで協力し、よい学級や学校をつくる」
４年〔問 14〕「正しいことは、自信をもって行う」
〔問 21〕「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、自分と異なる意見も大切にする」
５年〔問 13〕「よいことや悪いことを自分で判断し、責任ある行動をする」
〔問 20〕「時と場をわきまえて、礼儀正しく接する」
〔問 21〕「友達と互いに信頼し、学び合って友情を高め、男女仲よく協力し助け合う」
６年〔問 22〕「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、自分と異なる意見や立場を大切にする」
〔問 24〕「誰に対しても、差別することや偏見することなく接する」

【資料 17　各学年の重点項目質問調査の変容】



⑵　今後の課題と取組

本年度の実践を経て、以下のような課題があがった。

① 道徳的行為に関する体験的な学習（役割演技等の表現活動）の道徳科の授業において、深い学びになるような授業展開の工夫
② PDCA サイクルを意識した児童の道徳性を価値付けるための評価や声かけ
③ 家庭・地域へのさらなる啓発

今年度は、道徳教育の研究推進校となり、我々教師も確実に道徳科の授業の指導力を高め、それを教育活動全体に生かしている実感を得ることができた。今後も児童の心の成長を願い、「考え議論する道徳科の授業」をさらに発展させていき、自他を大切にする児童を増やしていきたい。